

47 新宮涼庭訳述の「続内科則」について

中西 淳 朗

神奈川県保険医協会

演者は幸運にも新宮涼庭訳述の「内科則」二種と、「続内科則」とを揃えることができ、小研究を行ったので茲に報告する。

かねてより演者はゲラルド・ファン・スウィーテン著の『Korte beschryving en Geneeswys der Ziekten, die Veelvints in de heilceegers voorkomen』（軍中備要方と略称）第二版一七六〇年蘭訳本も架蔵している。涼庭訳述の「内科則」はこの軍中備要方の訳本であるが、原本の脚註部分の翻訳は省いている。二〇〇四年、津山洋学資料館の洋学研究誌「一滴」第十二号に、宇田川玄眞訳述の『遠西軍中備要方』について——原本並びに他訳との比較——と題して些少の研究成果を発表した。

右の拙文の中で、軍中備要方の主文の目次比較を、

拙訳、新宮訳、宇田川訳を並べて一表として示したが、この作業の中で新宮訳、つまり「内科則」には、間歇的な春の発熱、三日目に出る熱の両章が欠けていることを知った。（資料当日配布）

新宮涼庭の研究者・山本四郎は、涼庭著の『泰西疫論』の吉雄永民（忠次郎）撰の序文をかかげて、大医ブレンキの弟子の長崎蘭医バティに教示をうけた涼庭は、自分が治癒せしめなかつた文化十四年の長崎疫病が、当時の欧州で研究されていた神経熱であることを知り、バティから借用したフーフェランド及びコンスプリュブラの著書から疫病論を収録して、『泰西疫論』（前編・神経疫部、後編・腐敗疫部）が成ったと解説している。このことは弟子の交部香も同書の附言で述べており、スウィーテンの軍中備要方から神経疫部に相当すると思われる間歇的な春の発熱と三日目に出る熱の両章を削除して、涼庭は「内科則」と題したとなる。ここに記した「内科則」は文政九年（一八二八）の山崎氏書写本（A）で、中山沃氏所蔵本と同一内容（多少順序が異なる）である。

別の無署名写本(B)も演者は架蔵しているの、問題の部分を比較すると、Bでは間歇的発熱、春熱、秋熱、三日熱、黄疸、水腫、嘔吐、コレラ、下痢、赤痢の十章を欠いている。これらはAの中巻、中山本の巻之二にほぼ相当し、書写した人物がこの十章は、『泰西疫論(腸チフスと敗血症)』の中にまとめられていると誤解したと考えられる。

新宮涼庭が順正書院で行った内科講義は、「内科則」は申せない。そこで「続内科則」(架蔵の無署名写本)では何が講ぜられているか、目次を作製してみると次の如くであった。

卷之一 (卒中部、利疾部、腹痛部、胃焮痛部、胆汁腹痛部、停食腹痛部、風氣腹痛部、寒冷腹痛部、ポイトウの腹痛部)、卷之二 (月経、疼痛、息迫、驚駭、傷風)、卷之三 (疑症肺焮症腫部、焮症熱部、疏滌部)、卷之四 (痘疹部、小兒胎糞部、驚風部)、卷之五 (昏暈部、中毒部、疼痛部、諸中咬螫部、妊娠部、小兒生齒部)、卷之六 (葉劑部) となっている。即ち「続内科則」

に到って、はじめて新宮涼庭の内科講義の全容を知ることができるのである。

「続内科則」は余り知られていない写本であるが、嘉永五年(一八五二)の穂亭主人記の「西洋学家訳述目錄」に収載されている。また日本医学文化保存会編の『医学古書目録』(昭五一)には、富士川本(京大)と田口本(忍城南文庫)がのっているが、田口本は巻之三までしかなく不完全本である。

なお「続内科則」の本文頭書きは、

丹後 小民 新宮碩涼庭抄訳

門人 宍戸延大齡 筆記

芸州 吉村忱子迪 筆記

となっており、

原本名の記入はない。

新宮涼庭の内科講義の全容を知るには、「続内科則」が不可欠である点を強調した。